

図書室に満ちる自然史のオーラ ～大英自然史博物館

延原尊美



Uncovered Event で原画の迫力や質感を紹介。

電子書籍も便利だが、本屋と図書館に惹かれる。目的外のものとの思わぬ出会いがあるからだ。ふとした偶然であまり関心のなかった世界に眼を開かされることもあるし、その場の雰囲気からひらめきが降りてくることもある。そのような「なにものか」と遭遇しそうな空気は、博物館や大学の学科の図書室にもただよっている。

20年以上前のこと、修士論文の締切が差し迫る中、ある文献を探しに学科の図書室にこもった。しかし、目的の雑誌のその号だけが見つからない。さがしているうちに、別の記事に眼がうつり、そのまま妄想の世界へ・・・ところがそこから全く違う発想で研究が思わぬ方向に展開した経験がある。今ではインターネット検索で容易に目的の文献の中身がPDFでダウンロードできる時代となった。その反面、図書室のいろいろな効用が見落とされがちな点が少し気になっている。

2015年8～9月、大英自然史博物館で深海性貝類のタイプ標本（新種を提唱したの時の基準標本）を調査する機会をいただいた。標本収蔵室にこもり標本のスケッチ、計測、写真撮影を黙々とこなしていく。ときにその標本を新種として提唱した論文の記述や図版と、その標本自体との比較が必要になる。PDFの図では、大きさの実感がわからない、細部がいまいち等々、目の前の微妙な貝殻の質感を原図と直接並べてみなくては、分類の混乱を解くための形質の差異に確信がもてない。キュレーターのスルバードールさんをお願いすると、収蔵室隣の図書室



貴重な文献や原画の質感を失わないよう、最新のデジタル化技術も研究中。

から19世紀末の貴重な図書が当たり前のように取り出される。そして、その論文で記述された記載内容が、100年以上たった現在において、（ひょっとしたら初めて？）再検討されることとなる。この図書室は研究者のこのような活動をこれまでどれだけ支えてきたことか。図書室の膨大かつ貴重な文献に囲まれてたたずむと、歴代の研究者の痕跡がオーラのように残っているように感じる。この中でじっくりと勉強したい、これを確かめれば新しいことがわかるかも・・・そんな空気に触発されることも図書室の効用だと思う。

夏休み中に大英自然史博物館は、Uncovered Event と称される市民向けのナイトプログラムを催している。夜の博物館に、ヨーロッパから研究者が集まり、現在進行中の研究をフクフク感いっぱい市民にアウトリーチするお祭りである。博物館の図書室の一部もオープンされ、学芸員の方々が貴重な文献の紹介や図書の保存事業を生き生きと説明している。デジタル化や電腦社会が進行するなかで、博物館のなかの図書室は「人」と「知識」と「なにかのオーラ」が出会い化学反応を起こす場所として、新たな道を歩んでいるように感じる。自然史博物館が人の集う場所である限り、ライブラリというわくわくする空間をどのように維持するのは、大事なポイントだ。世の中のデジタル化が進むがゆえに、自然史博物館のライブラリへのユニークな取り組みが、その館の未来を左右するだろう。